



稲作農家 各位

山武稲作情報 第4報

(2021年7月1日発行)

山武農業事務所 改良普及課
 電話 0475-54-0226
 FAX 0475-52-7914

山武地域の生育状況

6月に入り平均気温は平年並みの傾向となり、日照時間はやや多くなりました。そのため、各品種ともに幼穂形成期が平年よりやや早くなりました。穂肥の散布時期を迎えている品種もありますので遅れないように注意してください。

また、葉いもちの発生も散見されています。高い気温と多照が続くと、出穂期が早まりますので、葉いもち・紋枯病やカメムシ類も早めに防除しましょう。

表1 作柄調査ほ等の生育（平年値は過去10年（成東育成地は7年）の平均）

品種	場所	年	移植日	葉令	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 SPAD	幼穂形成期 (予測値)
【飼料用米】								
アキヒカリ	山武市	2021	5/7	-	57.0	712.0	43.5	6/16
夢あおば	山武市	2021	5/14	-	61.5	461.7	42.7	(6/30)
【主食用米】								
ふさ おとめ	山武市 (白幡)	2021	4/25	10.5	50.0	444.5	40.3	6/16
		2020	4/29	11.6	53.0	532.0	38.7	6/18
		平年値	4/27	11.7	52.2	574.6	38.8	6/20
	山武市(成東 育成地)	2021	4/26	10.6	53.0	626.3	37.9	6/15
		2020	4/24	11.4	51.0	585.0	38.6	6/12
		平年値	4/24	10.5	50.0	565.9	38.2	6/16
ふさ こがね	山武市 (井ノ内)	2021	5/3	10.4	58.0	516.4	42.5	6/20
		2020	5/2	11.5	66.0	613	42.5	6/20
		2020年から新設のため、平年値無し						
	山武市(成東 育成地)	2021	4/26	10.7	55.1	633.6	40.3	6/18
		2020	4/24	10.5	56.0	582.0	37.6	6/15
		平年値	4/24	10.3	52.5	569.7	40.0	6/17
コシ ヒカリ	東金市 (幸田)	2021	5/3	10.9	60.0	426.2	33.3	6/23
		2020	5/2	11.0	67.0	379.0	37.7	6/26
		平年値	4/26	11.2	64.2	404.9	37.9	6/28
	山武市(成東 育成地)	2021	4/26	10.6	61.4	572.5	33.4	6/24
		2020	4/24	11.0	62.0	442.0	32.7	6/20
		平年値	4/24	10.4	61.9	496.9	35.0	6/24
粒すけ	東金市(前之内)	2021	5/6	11.0	54.3	564.6	38.2	6/25
	山武市(成東 育成地)	2021	4/26	11.4	56.3	568.6	35.8	6/24
		2020	4/24	11.3	59.0	489.0	35.3	6/19

表2 出穂期（予測値）

品種	ふさおとめ			ふさこがね			コシヒカリ			粒すけ			
	移植日	4/20	5/1	5/15	4/20	5/1	5/15	4/20	5/1	5/15	4/20	5/1	5/15
出穂期	7/8	7/13	-	7/9	7/14	7/23	7/17	7/22	7/30	7/16	7/22	8/1	

予測値は令和元年度試験研究成果普及情報の推定式により気温（アメダス横芝光）から計算して推定（「粒すけ」は調査ほ等の生育から推定）。移植時の苗の葉令、活着状況、ほ場ごとの気象条件、予測日以降の気象条件等による誤差があります。

これからの管理のポイント

○低温時の水管理

幼穂形成期から出穂期にかけては、**障害型冷害**が発生しやすい時期です。この時期は、**花粉が分化**する時期にあたりますが、低温にさらされると障害が発生して受粉せず、不稔粉が増加します。

低温障害を防ぐためには、**深水管理**が有効です。幼穂を水面下にする事で、**水の保温**により低温から守ることができます。20℃以下の低温が続くことが予想される時は、幼穂の伸長に応じて水位を確保するようにしましょう。

○斑点米カメムシ

出穂期になってから畦畔の草刈りを行うと、カメムシ類がほ場内に逃げ込んでしまいます。**畦畔雑草の刈取は出穂の2週間前まで**に終了させましょう。

病虫害防除について

○いもち病

いもち病菌はカビの一種で、発芽時から収穫時まで発生する病気です。**曇天雨が続き、25℃以下の平均気温が続くと発生しやすくなります**。いもち病は発病する部位によって、葉いもち、穂いもちなどと呼ばれます。葉いもちには紡錘型の病斑が特徴的であり、発生初期は褐色（図1）、進展すると最外部は黄色、内部が褐色、中心部が灰色（図2）になります。

最も収量減となるのは**穂首いもち**で、出穂期頃に感染して褐変し、穂全体が枯死して白穂になります。

葉いもちが穂いもちの主な伝染源となるので、**出穂期を迎える前までに葉いもちの治療**を行い、穂いもちを予防しましょう。また、**補植用苗も発生源**となるので、補植作業後は残った苗を速やかに処分しましょう。



図1 発生初期のいもち病病斑



図2 進化したいもち病病斑

○紋枯病

紋枯病は幼穂形成期頃になると発生しはじめ、8月の**最高気温30～32℃、多湿で最も発生しやすい**病気です。葉や葉鞘に内部は灰白色、周縁部は緑褐色の病斑が発生し、下位葉から上位葉に広がると収量に影響します。

収量に影響するのは上位葉、特に止葉から下位3葉に被害がある場合です。止葉から数えて4葉目で発病している時期に薬剤を1回散布して拡大を防ぎ、病気が収まらない場合にはもう1度散布しましょう。また、常発田では予防として粒剤を散布することが有効です。



図3 紋枯病病斑